

令和七年の今年。戦後八十年。一席の「島の塔頭（タッチュー）と電照菊」は
図らずも時宜にかなった作品となった。「ぼく」は農業実習生としてミヤンマー
（旧ビルマ）から沖縄の百渡島にやってくる。前半は明るい実習の日々を描くが、
後半一転、オーナーの祖父の隠し続けていた戦時下の記憶の生々しい執拗なほ
どの描写に移っていく。人間が人間でなくなっていく戦争の恐怖。今も、世界
どこかで争いは絶えず、飢えと絶望のうちに死にゆく人々がいる。子供達の命が
失われていく。逃げずに忘れずに戦争を語り、走り続けていこうとする作者の必
死な気持ち伝わってくる。

二席の「アサギマダラ」は美しい作品である。時代は進み、今や地球は破壊つ
くされ、ついに火星移住計画が実施され、健太は有人火星飛行の乗組員として旅
立っていく。

……火星に行ってみたくないか。俺が連れてってやるから。

健太の言葉が亜希の心にリフレインされる。ファンタジーのようでないながら、
リアル感の強い作品である。末尾の亜希の祈りに自然に涙がこぼれた。無条件に
胸を打つ作品との出会いは楽しい。

佳作「春の嵐」は、究極の愛の物語である。円福寺住職の春嬰と対岸の島の善
長谷教会の修道女ヨシ。決して結ばれることのない二人は生涯をかけて、互いに
突く鐘の音に思いを託し続ける。現代では有り得ないような、しかし有らまほし
き物語である。

その他の最終選考候補作品についても紹介したい。

「八月の白い月」には心が洗われるようであった。発達障害の太陽くんの描写
が愛おしい。彼を囲む家族の愛情がしみじみと伝わってくる。夏休み、離島の祖
母の家で起こった不思議な出来事。不思議も日常の続きのように自然なことで

して受けとめる生活の有り様が何とも良い。

「通り雨のあとに」。繊細で清潔な表現。小さな島の閉館間近な図書館が舞台。三人の職員の何気ない日常。裏庭の民宿「オバアの宿」。ガジュマルの木。ある時フラリとやってきた若い旅人トーンさん。小さく物語が動き出す。生きていることの喜びが伝わる。

「たそがれ」は終末期の脳内と心理を抉り出した恐ろしさがあった。作者の表現に対する執念が伝わってきた。

「島の記憶」「しまうま」の二作品も個性的で独自の世界を切り開いていた。新しい世界を見させてもらった。これら八編の候補作品から入賞作品を選出するのは困難でさえあった。

ところで、第八回の募集ポスター・チラシは、例年のように日本を代表する写真家石川直樹氏の美しい写真で刷られている。木もれ陽の庭に佇む少女、風の草原に眠る少年。幻想と現実のあわいにいるようなふたり。石川氏は世界的な登山家であり、また優れた文章家でもある。その澄明な眼と心がこの島に注がれている。

今回の応募作品は九十八点。これらのまなざしが島の文化の光となって全国へ広がっていくのだ。